

資料編

荒川村原およびその周辺の天狗祭り

高橋 稔

I 地域概況

秩父地方は、古くから信仰の地として知られている。その背景には、山岳信仰の対象となった複数の霊山、巡礼が行き交う秩父札所三十四か所、妙見の信仰で知られる秩父神社などがある。天狗祭りが行われる荒川村原地区は、秩父地方のほぼ中央に位置している。周囲を覆う山並みは秩父連山で、これらの山々の中には霊山と呼ばれる独立峰が見られる。武甲山・両神山・三峰山などで、いずれも古くから山岳崇拝の対象になり、修験の山としても栄えてきた。

霊山や周辺の山々には、天狗に関する話も多く知られるところである。両神山には、天狗の石像が1基、青銅の大天狗・小天狗・烏天狗がそれぞれ1基ずつ見られる。天狗は、それを語る人や場所によって異なり、統一されたイメージではない。本稿ではこの天狗伝承に関し、原地区の天狗祭りを中心にその実態を報告する。

原地区の南方に高くそびえる山岳は、熊倉山(標高1427m)で、その山麓は古くから開けていた。和名抄に記されている上断郷は、現在の荒川村域の東部に比定される。熊倉山には、中世の城跡がある。文明年間(1469～1487)に山内上杉家の長尾意玄入道景春が、主家に反旗をひるがえし大田道灌に追われて籠もった山城という。近世における原地区は、白久村に編入され、天領として忍藩の松平氏によって統括された。

白久村は、荒川の上流部から順に、猪鼻・上サ・青梅・中野・原・橋場・豆サ原の7耕地(集落)からなる。交通の要路である秩父往還は荒川に沿って開かれ、秩父と甲府を結ぶ。原周辺の道標には「三峰山」や「大日向山道」などが見え、大滝村の栃本には関所が設けられていた。秩父往還の難

点は、山中の難路に加えて荒川本流の渡し場が多かったことである。荒川右岸にある白久・日野・上田野地区は、左岸の賛川・小野原地区としばしば寸断されていた。対岸にある集落への往来は、夏の増水期には渡船、冬の渇水期には仮橋に頼った。天狗祭りは地区によりテンゴウ祭りともいわれるが、呼称の使い分けが小野原地区以西と日野地区以東で分かれることは荒川が存在と関わりがあるとみられる。白久村は、明治22年(1889)4月1日に、賛川村と合併して白川村になった。さらに昭和18年(1943)2月11日に白川村と久那村の2村を合併し荒川村となって現在に至っている。

本稿の目的は、原の天狗祭りを記録することにある。天狗祭りは、かつて荒川村全体に見られ、その数は今回の調査で25を確認することができた。近年になって上田野地区の石原で復活されているものの、大半の天狗祭りが昭和30年代のころまでに消滅した。そのため、いま正確な記録を残しておくことの必要性は大きい。

天狗祭りは子供だけで行われる。祭りを指揮する人は、大将と呼ばれるその年の最上級学年生である。原の子供たちは、この行事を通してさまざまな体験をする。そこにはともすると忘れられがちな子供仲間の世界が残されている。原で育ち天狗祭りを体験した人は「一生忘れられない」という。戦前までは、20人以上の子供が参加して盛大に天狗祭りが行われていた。現在はその数は10人あまりである。従来は子供のみで行ってきた天狗祭りであるが、近年は大将の親などが準備を手伝うようになっている。

II 荒川村における天狗祭りの分布

「天狗祭り」「テンゴウ祭り」と呼ばれる子供

たちの祭事は、かつて荒川村内で盛んに行われていた。祭日は旧暦の12月15日で、古老たちは、この日を「当たりの日」と言った。荒川村の天狗祭り・テンゴウ祭りは、第1表のとおり、かつては25か所を数えることができた。おおまかにいえば、集落の単位で祭りが行われていたといっていよい。その多くが昭和30年代に中断している中で、「原の天狗祭り」だけが今日まで続けられている。秩父地域の天狗祭りについては管見の限り、これまで十分な調査が行われていない。そこで、まず荒川村内でかつて盛んであった天狗祭りの分布を概観しておきたい。

1) 天狗祭りの分布

荒川村を旧村単位でみると、贅川・白久・小野原・日野・上田野・久那からなる。集落数は贅川7、白久7、小野原3、日野5、上田野10、久那1の合計33である。天狗祭りはほぼ村内全域の集落に分布する。天狗祭りの分布を荒川沿いに見ると、最上流の集落は大滝村と境を接する猪鼻である。天狗祭りは、荒川村に隣接する大滝村や両神村にはない。分布する最下流部の集落は、秩父市と境を接する久那である。

多くの集落が集落ごとに単独で天狗祭りをを行っているが、上田野地区がやや異なっている。この地区は、上半縄と下半縄、船川・靴屋・栃久保、上石原と下石原の3地区の集落がそれぞれ1つの単位となって天狗祭りを執行している。

古くから天狗祭りを行っていない集落も存在する。贅川地区の大指と古池、小野原地区の柴原と鷺の巣である。この4つの集落には天狗祭りが無い。これらの集落は、両神村・小鹿野町に接するところに位置している。大指・古池・柴原の3集落は荒川からも離れており、生活圏はむしろ隣接町村に属するといっていよい。また鷺の巣を含め、いずれも数戸の小集落という点では共通点がある。小集落であれば、当然子供の数も限定される。天狗祭りが行われない理由は、このへんにあろう。

2) 天狗祭りの呼称

荒川村の天狗祭りの呼称は、「天狗祭り」と「テンゴウ祭り」に分けられる。呼称の意味の違いは

定かではないが、分布上に明確な使い分けがなされている。使い分けの境界は小野原地区と日野地区のあいだにあり、小野原より上流は「天狗祭り」と言う人が圧倒的である。それに対し、日野地区より下流では、「テンゴウ祭り」と言う人が多い。両地区の境は荒川の本流で、かつては渡し場になっていた。現在は国道140号線の荒川橋によって結ばれている。この地点を境にして天狗祭りの呼称が異なる。原集落は「天狗祭り」との呼称分布地域内に位置づけられる。とくに、戦前生まれの人たちは、この使い分けが明瞭である。

3) 祠と祭神

ここで、天狗祭りの祭神と祠について整理を行う。天狗祭りは火祭りであるが、原では火を放つ直前に「お天狗様」の祠を参加者全員が参拝する。この祠は、同集落内の一農家の個人持ちである。祭神は天狗を合祀したと思われるが、金比羅の祠であるという。天狗祭りの祭神は天狗に疑いないが、その祠は一樣ではない。ほとんどが個人持ちで、集落によっては祠がないところも見られる。

上サや豆サ原の集落では山の神を祭っている。大塚では大六天神社で、事上では白髭神社である。下田野のように、天狗祭りの当日に河原石を積んで、天狗様とする例も見られる。大六天神社や白髭神社が天狗を合祀しているのかどうか定かでない。反平と上平は、集落に近い山頂のお天狗様を共同で参拝し、毎年10月24日には「お天狗様のお祭り」を行っている。

天狗の祠がある場所は、集落全体が見おろせる小高い山頂や斜面が一般的である。近くには「天狗の松」とか、「天狗の腰掛け松」などといわれる松の老木が見られる。こうした場所やその周辺には天狗にまつわる話も多い。しかし、地域によって天狗に関する話はさまざまであり、荒川村内での民衆信仰としての天狗の存在は、統一されたイメージではない。

4) 競争意識

秩父地方では、かつてムラへの帰属意識が強く、その意識から集落間の対立がおこる場合もあった。対立感情がこうじて、投石合戦に発展するこ

第1表 荒川村における天狗祭りの分布

旧村名	集落名	祭りの呼称	祠または祭神	天狗小屋などを作る場所	参加者	主な構築物			日待ちの有無	祭りの中断年	備考
						大天狗	小天狗	小屋			
荒川	下郷	天狗祭り	お天狗様	下池	小中学生(高等2年)	○	○	○	有	昭和30年代の半ば	大きい大天狗を作ると学校から指導者が来て小さくさせた
	反平	〃	〃	スナゴ	〃	○	○	○	〃	〃	昭和15年ころは12、13人ほどが参加していた
	上平	〃	〃	▲丸田	〃	○	○	○	〃	〃	反平とともに10月24日にお天狗様のお祭りをする
	上郷	〃	〃	川端	〃	○	×	×	〃	〃	天狗様の祠への参拝は祭日の午前10時ころ行った
	大指	――	――	――	――	――	――	――	――	――	――
	古池	――	――	――	――	――	――	――	――	――	――
	町分	天狗祭り	お天狗様	綱掛け	小中学生(高等2年)	○	○	○	有	昭和35年ころ	祭日の月を拝むならわしがある
白久	猪鼻	〃	〃	田端屋の下	〃	○	○	○	〃	〃	天狗の松があり天狗はそこにおりてくるという
	上サ	〃	山の神	▲愛宕山	〃	○	○	○	〃	〃	天狗祭りの材料はどこから伐ってきてよいといった
	青梅	〃	お天狗様	橋の木沢の下	〃	○	×	○	〃	昭和37年	日待ちは餅とケンチョン汁で行う
	中野	〃	〃	▲円通寺付近荒川右岸	〃	○	○	○	〃	終戦直後	天狗祭の場所は山から川へ移っている
	原	〃	お天狗様(金比羅様)	▲前山	〃	○	○	○	〃	継続中	子供の数も減少し近年小天狗を作っていない
	橋場	〃	お天狗様	▲前山荒川右岸	〃	○	×	○	〃	昭和30年代の半ば	集落が5戸ほどなので小天狗は作っていない
	豆サ原	〃	山の神	▲ヒノチ沢上	〃	○	○	○	〃	昭和18年ころ	昭和初期の灯明料は1戸当たり5銭から10銭であった
小野原	柴原	――	――	――	――	――	――	――	――	――	――
	鶯の巣	――	――	――	――	――	――	――	――	――	――
	小野原	天狗祭り	山の神	▲東さし	小学校の6年まで	○	×	×	有	終戦直後	大天狗をヤグラという
日野	松葉	テンゴウ祭り	お天狗様	▲天狗様境内▲オシテ沢下	小中学生(高等2年)	○	○	×	無	昭和30年代の半ば	麦カラは各家から2束ずつ集めて天狗祭りを行った
	大塚	〃	大六天神社	▲大六天の田	〃	○	×	○	〃	〃	大天狗の柱には栗の木を多く用いている
	下日野	〃	お天狗様	荒川右岸	〃	○	○	×	〃	〃	河原石を3、4個積んで天狗の宮を作った
	寺沢	〃	山の神	▲山の神	〃	○	○	○	〃	終戦直後	天狗様は山の神でもあらうという 小屋の火災がおきている
	芦川	〃	お天狗様	和田河原	〃	○	○	×	〃	〃	天狗祭りには使う木はこの山から伐ってもよいといった
上田野	坂口	〃	〃	大島河原▲八割	〃	○	○	×	〃	昭和40年代後半	芋を焼いているうちに火災をおこし中断の原因となった
	上半縄 下半縄	〃	〃	▲公会堂の畑荒川右岸	小学4年生から高等2年	○	○	×	〃	昭和30年代前半	戦後になって公会堂付近の畑から河原へ場所が移った
	事上	〃	白髪神社	▲白髪神社	〃	○	×	○	〃	戦前	昭和になってからは数えるほどしか行っていないという
	越	〃	山の神	▲前の山	〃	○	○	×	〃	昭和30年代初期	戦前は15人から20人の子供が参加した
	船 杭 屋 橋 久 保	〃	〃	▲ニタンザワ	小学6年生から高等2年	○	○	×	〃	昭和30年代の半ば	祭りの前日にニタンザワの岩上に山の神を祭って拝んだ
	上石原 下石原	〃	お天狗様	飛沼	小中学年生(高等2年)	○	○	×	〃	昭和39年ころ	昭和58年に大人が加わって復活し各年ほどに行っている
	久那 久那	〃	〃	馬洗い	〃	○	○	×	〃	大正初期	荒川村内で一番早く中断した天狗祭りである

④天狗小屋などを作る場所の▲印は、山地で火祭りを行うところである。無印は河川をいう。

ともあった。天狗祭りをを行う子供の世界にも、そうした意識がみられた。火祭りは大天狗、小天狗と呼ばれる工作物を焚付けて行った。「大天狗を燃やすのは最後がよい」とされ「小天狗はおとりに燃やす」といわれた。このため、古くは多くの集落で小天狗を作っていた。火祭りが盛んであったころは、隣接集落の点火状況を見ながら、自分たちの大天狗に点火した。戦前は点火の時刻が午前0時近くになる集落もあった。

なかには、よその集落に出かけて行って、大天狗を燃やしてしまった例もあるという。このため、一部の集落では大天狗などを守る役を出して警戒した。大天狗や小天狗の大きさなどでは隣接集落との競争意識が見られ、しばしば学校でも話題となった。

5) 火祭りの場所と構築物

火祭りをを行う場所は、大別して山中と河原で、その分布はおおむね半々ぐらいである。白久地区の中野は初め山で行い、戦後になって荒川河川敷に移っている。上田野地区の坂口は、逆に大島河原から八割という畑に移った。火祭りが行われる場所が移る理由には、大天狗などの失火がある。寒いので火を燃やしているうちに火事となり、その結果大人たちの指導も加わって、翌年から場所が移るといったケースが多い。

火祭りの構築物は、大別して大天狗・小天狗・小屋である。小屋が作られない場合は、小屋の機能を大天狗や小天狗の中にもたせて間に合わせている。明治生まれの原の古老は、小屋を作らない形が古い時代の作り方であると言っている。大天狗はどの集落でも作るが、小天狗と小屋は子供の人数によって作られないこともあった。

6) 日待ち

天狗祭りの準備に、灯明銭集めがある。これはどの集落でも行っていた。大将たちが菓子を買って食べたり、祭日に集まった女子などに菓子を配るために使われた。荒川村における荒川下流の集落には、お籠りをする日待ち行事がない例もあり、そこでは、大将が買った菓子を小屋の中で食べる程度である。

小野原より上流では、大将の家や集会場などで日待ちを行うことが一般的である。日待ちの食物は、小豆あんの餅とケンション汁が多い。これらは、その年の火祭りに参加した児童生徒の親たちが出て、準備を進めるのが普通である。集会場が各地区にできたのは近年で、それ以前は大将の家が宿になる場合が多かった。日待ちが始まる時間は、夕刻である。例年、宿でゆっくり日待ちを楽しんでから、小天狗や大天狗に火を放った。

7) 祭りの中断と理由

荒川村で天狗祭りを最初に中断したのは、久那であるという。大正7年(1918)生まれの人の話では、大正末期にはすでに中断されていたという。中断の理由は、大正5、6年ころ天狗祭りの火遊びで、農家が1軒全焼してしまった。以後、大人の指導もあって中断したまま現在に至っている。昭和20年(1945)前後に中断した天狗祭りも数例ある。子供の数が少なくなったことと、過失による火災などがその理由になっている。

昭和30年代の半ばになって、天狗祭りが相次いで行われなくなった。原因は当時の学校側の指導である場合が多い。火の危険性や夜中の行事であること、さらに灯明料の問題などが加わっていた。そのころは、学校側の指導者が各集落を巡回した。規模の大きい大天狗は、注意を受けて小さく作り替えられたりした。中断したのは、天狗祭りだけではない。子供の行事である天神待ちや卒業日待ち、トオカンヤ(十日夜)なども同様であった。中断の大きな理由として、父兄や学校の影響が強かったことは否定できない。

Ⅲ 天狗祭りの準備

天狗祭り準備開始の目安は、「アサキの葉が落ち始めるころ」である。秩父地方のそのころは、毎朝といってよいほど降霜がある。日照時間が短くなり、山道や沢に落ち葉がたまる。準備はこうした頃に始められた。天狗祭りの準備で最も重要な作業は、「大天狗」といわれる三角錐の櫓を作ることである。大天狗は三角錐のものが多いが、

地域によっては四角錐の大天狗を作った例もある。どの集落でも、大天狗は必ず作る。大天狗のほかに小天狗と小屋が作られる場合も多い。集落の大小によって子供たちの数も異なるので、それに見合った大きさの櫓が作られた。

大天狗の柱は、直径が20cmを越える雑木や太い竹であるが、子供たちはこの柱の材料になる木を山中で見つけて歩く。これを伐り倒し天狗祭りをを行う場所へ搬出するのが一苦勞である。原の子供たちは、柱材のことを「三本木」と呼ぶ。祭りの準備期間は、1か月から2か月を要する。本稿ではその間の作業を平成元年(1989)に中学3年生に進級して「大将」になった新井康史君の日記と筆者の観察にもとづいて記述する。

なお、火祭りに参加できる子供たちは、現在、小学1年生から中学3年生までになっている。かつては、高等科の2年までが、天狗祭りに参加できる対象学年であった。原の古老は、現在の大将にあたる人を「親方」と言っている。

1) 草刈りと穴掘り

天狗祭りの準備は、メエ山(前山)の草刈りに始まる。平成元年は9月17日の日曜日に行われた。その連絡は、1週間ほど前に大将が天狗祭りの参加者全員に伝達している。この年の天狗祭りに参加した原の子供は8人であった。対象者は11人であるが、そのうち3人はブク(忌み)のため参加していない。子供たちは打ち合わせ通り、午前10時に広場に集合した。「広場」と呼ばれる場所は、集落の中心部で庚申塔や二十三夜碑などの石碑が建っている。山に入るの、上級生はいずれも腰に鉈をつるし、手には鎌を持っている。

天狗祭りが行われる場所は前山のタルノクチという所である。子供たちは、前山の入口から順に草を刈りながら、タルノクチまで進む。タルノクチは北向きの斜面で、原の耕地全体が見渡せる。タルノクチの草刈りは、念入りに行く。タルノクチから東の方角に10mほど行ったところに、お天狗様の祠と天狗の松がある。そこまでの山道も草刈りを行う。草刈りは、途中で休んだり遊んだりして進められ、作業が終わるのは昼ころである。

草が刈り取られたタルノクチには、昨年(平成元年)における天狗祭りの穴掘りは、前年と同じ位置に掘られることになった。大将たちがスコップを使って、大天狗の穴4つを掘る。そこは何回となく利用されているため、土が軟らかい。

大正時代の中ごろには、大天狗・小天狗・小屋がそれぞれ別々に作られていたという。そのころの大天狗は、現在のものよりはるかに大きく、柱は4本であった。このころの穴掘りは、ツルハシや唐鍬などを使った。当時は20人以上の子供が、天狗祭りに参加していた。

2) 大天狗と小屋づくり

a 大天狗作り 大将を中心にして、子供たちが力を合わせて行う作業は、大天狗作りである。中心の穴に竹を建て、それを包み込むように「三本木」を三角錐に立てる。いずれも長い材料なので、上部にロープをかけて引っ張りながら1本ずつ立てていく。このとき、穴の部分に竹や木の元の部分をあてがい、大将たちが足で押さえるなど、ずれないようにしておく。最初に竹を立て、直立させた位置で穴を埋め戻す。同様にして、大天狗の三本木をそれぞれ立てていく。大天狗はこの状態では不安定なため、三角錐の頂部をトヅラなどで結束しなければならない。大将が、三本木のうちの1本によじ登ってその作業を行う。

その後、横木を通す。横木は、大天狗の外面に6段から7段ほど組み込まれ、それぞれをトヅラで三本木に固定する。下から順に行い、組んだ横木に登って次の横木を入れていく。頂部が結束され、下から横木が数本入った段階で、大天狗は安定する。

b 小屋づくり 三つ又と呼ばれる又の付いた木は、小屋の四隅の柱材として用いる。4本の三つ又の長さをそろえ、既に準備してある杭にしばりつける。三つ又の柱の中間には、3本の二又を入れる。こうして、それぞれの柱を立て、又の部分に丸太を乗せて固定していくと、おおむね小屋の骨組みが完成する。大天狗に面した部分は、三本木まで桁を通しておく。大天狗と小屋の間に

は台形状の空間ができることになる。これらの作業は、大將が要所要所で指示を出して進める。力仕事や危険な仕事などは大將を中心に進められ、低学年は上級生の仕事を見ている。そのやり方を見て、徐々に仕事を覚えていく。

3) 麦カラ集め

大天狗と小屋の骨組み作りは、1日ほどを要する。このため、麦カラ(わら)集めと壁作りは、翌週にもちこされる場合が多い。麦カラは集落全戸から集めるならわしであるが、近年は農家数の減少と麦作の激減が著しく、麦カラ集めは難しくなっている。集落内の農家で麦作を行っている家に協力を依頼し、集められるところからかき集めるといった状況である。よその集落に麦カラの提供を願い出ることもある。平成元年には、約70束の麦カラが集められた。

4) 天狗の枕付けと壁作り

「天狗の枕」は、大天狗の高い所に麦カラ1束を結わえ付けるものである。天狗の枕を付ける場所は、大天狗の三角錐の頂部にウラの付いた真竹が出ているが、そこに結び付ける。この作業は、大將が行うならわしである。天狗の枕は、天狗がそこに降りてきて座って休む場所という。ただし、大正時代には、現在のような天狗の枕を付ける風習はなかったとも言われる。

タルノクチに集められた麦カラは、大天狗の槽の中と小屋の屋根や壁に用いられる。残りはすべて小屋の中に敷き詰められ、床の代用として利用される。大天狗には、約50束ほどが積み込まれる。隙間がないように束のまま並べて、割り竹を使って三本木に押さえ込んでいくと、三角錐の内側がすべて麦カラとなる。

小屋の屋根と壁は、割り竹に麦カラを挟み込んで作られる。あらかじめ、屋根と壁になる部分の長さに割り竹を切りそろえておく。これを2本地面に平行に置き、麦カラを適当な厚さに敷いていく。二本の竹の間隔は、約40cmほどである。こうして、押えの割り竹の2本を最初の割り竹の上部に乗せ、両端と中央の1か所をトゾラなどで結束すれば、簡素な屋根や壁が一面できあがる。同

様にして、小屋の外部の屋根や壁部を作って固定すれば、ワラ葺きの小屋が完成する。入口は大天狗の反対側に設けられる。大きさは子供がもぐれば入れるほどである。

5) 大天狗と小屋の仕上げ

大天狗と小屋の仕上げは、ヒノキッパ(桧葉)で化粧される。桧の葉は、前山周辺から求める。大將たちが桧の木に登って鉋や鋸で枝をおろす。大天狗と小屋の外周すべてに小枝を挿し込んで化粧するため、たくさんの枝が必要である。上級生が大天狗に登り、高いところから作業を進める。桧の葉は、麦カラが外から見えないほどに挿す。大天狗も小屋も、濃緑色のベールに包まれる。子供たちの完成の喜びはひとしおで、全員が飛び上がらんばかりである。平成元年の天狗祭りの仕上げは、11月12日に行われた。

6) 灯明料集め

灯明料集めは、子供たちにとって楽しい仕事である。2、3人のグループを作り、集落内を集め回る。「お灯明料を集めにきました」などと言いながら家々を回り歩く。どこの家でも「ご苦労様」と言って、500円または1,000円くらいを出してくれる。平成元年の場合、集められた灯明料は3万円を少し下回る額であった。なお、灯明料はブクの家からはもらわない。

Ⅳ 天狗祭り

天狗祭りは、前述のようにかつては旧暦の12月15日に決まっていた。この日は満月に当たる。近年は、11月15日に近い日曜日に行われている。平成元年には11月18日が祭日になった。ここでは、祭り当日の様子を順に見ていきたい。

1) 集合とお天狗様の参拝

天狗祭りの当日、集合場所は広場で、時刻は午後2時である。大將は、祭りに必要なものを準備してくる。御神酒、袋詰めの菓子、お灯明料のお返し、鉋、鋸などである。全員が集まると、御神酒などを手分けにして前山へ登っていく。冬の日が落ちるのは早い。午後4時ともなれば、気温は

急激に下がる。そのころ、お天狗様の祠を参拝する。大將が、「拝みにいくぞ」と言うとき、全員が後を追う。お天狗様の祠は原地区の深田家個人持ちとなっており、同家では金比羅様はお天狗様であると言っている。深田家の氏神である金比羅様と若宮八幡様は、近年までトオカンヤ(十日夜)が行われる日の晩に祭事が執行されていた。神主を頼み、座敷に祭壇を設けて祭典を行う。サンマや大根などの神撰を供え、灯明をあげる。お天狗様の祠に集合した子供たちは、一升瓶の御神酒を竹の器に注いで供える。参拝が終わると、御神酒を下げて竹の器に注ぎ、大將以下が回し飲みにする。

2) 寄せ太鼓と菓子の配布

お天狗様の祠を拝んだ後は、小屋に戻る。小屋の中は暗いので、ローソクを灯す。これから大天狗に火を放つまでは、しばらく自由時間である。小屋には子供しか入ることができない。大天狗に近いところは上座で、ここに大將が陣取り、入口に向かって下級生が並ぶ。次の仕事は、寄せ太鼓を打って集落の人々を集めることである。人々が集まるまでの間、大將の命令によって校歌などを歌ったりして過ごす。天狗の祠を参拝したときに飲んだ御神酒がきいて、大將たちはほろ酔い気分である。張り上げる声も高く大きい。

このころになると、タルノクチは真っ暗である。大將の「太鼓をはたくぞ」という声がかかるのは、午後5時30分頃である。全員が小屋の前に整列して、寄せ太鼓に合わせて大声を張り上げる。その合図は、天狗祭りの準備が整ったことを集落内に伝えるほか、女子や小学生以下の子供たちを集めるためである。大將が打つ太鼓は早打ちの寄せ太鼓であるが、決まったリズムはない。太鼓に合わせて「ソーレ」という掛け声が入ると、残りの子供たちが「菓子をくれるぞ」とどなる。太鼓に合わせた呼び声は、原の集落に向かって、20分ほど続けられる。しばらくして、懐中電灯を手にした大人や地元の消防団、女子などが山道を登ってくる。親に背負われた幼児も見える。上級生の一人が、集まってくるすべての子供たちに、袋詰め菓子を手渡ししていく。菓子を手にした子供たちや、

見物に来た大人たちは、大天狗と小屋を囲んで火が放たれるのを待つ。

3) 点火

平成元年の点火は、午後6時を少しまわった頃に行われた。点火するのは大將で、小屋の中から大天狗と小屋との接続部分に火を入れる。その時、「燃やすぞ」と大声を発する。点火はローソクで行われ、麦カラなのですぐ燃え広がる。大將は、点火後すぐに小屋から飛び出してくる。白い煙が立ち登り、大天狗を覆うほどになる。麦カラが音を立てて燃えるようになると、やがて煙が炎に変わる。

火は風を呼んで燃え広がり、大天狗の頂部に向かっていく。桧の葉もパチパチ音を立てる。ときおり、青竹が大きな音をたてて跳ねる。この頃が、祭りのクライマックスといえよう。見物人からも歓声があがり、全員が壮大な火柱に酔いしれる。神秘的ともいえる火の照り返しに、顔も火照らなばかりである。

火勢が衰える頃を見計らい、大將たちは長い棒を持って近づいていく。この棒を「はじき棒」と言い、火中に突き立て、力を込めてはじき上げる。空中で一瞬燃え上がる炎は、闇の中では美しくさえある。繰り返しはじき棒を使って、燃え残りの麦カラなどを焼き尽くしていく。この間、点火してから約20分ほどである。2か月ほどをかけて作られた大天狗と小屋は、三本木などの骨組みの一部を残して焼き尽くされる。原の天狗祭りの終了である。火が下火になると、待機していた地元の消防団が加わって消火に当たる。「天狗祭りの火で火事になったことはない」と言われるが、乾燥期で落ち葉も多い。消火は念入りに行われる。

4) 日待ち

後片づけが終わると、集会所に向かって下山する。集会所では、関係者が集まって日待ちを行う。天狗祭りに参加した子供の親たちが、ご馳走を作って待っている。参加者は、子供たちのほか、区長や消防団、教育関係者や報道関係者であった。集会所ができる前の日待ちは、原地区の所有物であるギョウヤ(行屋)を使い、さらにそれ以前は大

将の家で行っていた。

V 天狗祭りおよび天狗に関する俗信と伝承

天狗祭りに関する俗信と天狗に関する伝承を列挙しておきたい。原集落に加え、荒川村全体のものである。()内は集落名を示す。

1) 天狗祭りに関する伝承

- ・昔から天狗祭りの火で火事になったことはない(原ほか)。
- ・天狗祭りの日に風が吹いても、点火するときには不思議と風が止む(原ほか)。
- ・構築物の点火の順序は、小天狗・小屋・大天狗の順に行う。大天狗の点火は、できるだけ遅く、しかも他の集落より後に燃やすとよい(原ほか)。
- ・大天狗などがだいたい燃えた後に、ハジキ棒を使ってできるだけ火をはじきあげるとよい(原・豆サ原ほか)。
- ・天狗祭りの火は怖くない(橋場)。
- ・火をつける前に、集落内へ燃やすフレを出した(大塚)。
- ・祭日の夜、参加者全員が大天狗の前に集合し、月を拝むならわしがある。これを「天狗を呼ぶ」といい、天狗は大天狗の上にやってくる(町分)。
- ・構築物へ点火する時間は、月が山を離れる頃である(橋場)。
- ・昔は、天狗祭りの翌日の朝早く片付けに行った。そのとき、天狗祭りの燃えくじを拾ってきて、自宅のかまどのそばに置いておいた。こうすると火事にならない(豆サ原)。
- ・燃えくじを焚き火に使うと、火事になる(原ほか)。
- ・燃えくじは、翌朝拾ってきて母屋の屋根の上に放り投げておくと火事にならない。また、燃えくじは魔除けになるといい、玄関の近くに吊しておく(中野ほか)。
- ・天狗祭りに使う材料は、どこの山から伐ってきてもよい(原・事上ほか)。
- ・大天狗の高いところに結わえつける麦カラは天狗の枕といい、天狗はここにおりてきて休む(原・

下郷・小野原ほか)。

・山師の天狗信仰は強く、天狗祭りのお灯明銭は普通の家の数倍も出してくれる(原・青梅ほか)。

・文久2(1862)年生まれの人が、子供の頃天狗祭りに参加したという話がある(亥鼻)。

・祭りの数日前、過失で大天狗と小屋が燃えてしまった。子供たちは、天狗様を拝みながらワーワー泣いていた。それを見て、気の毒に思った親たちが同じものを作ってくれた(上サ)。

・天狗祭りの点火前には、竹筒に酒を入れて大天狗の高いところや二階の部分に供えた(青梅・豆サ原)。

・テンゴウ祭りの日には、山の神の注連縄を張り替え、菓子のオヒネリを供えた(寺沢)。

・天狗の松に天狗が住んでいて、天狗がそこからテンゴウ祭りの火を見ているという。小屋の入り口は天狗の松に向けて作るならわしになっていた。筒酒もその方向に当たる入り口に供える(坂口)。

・テンゴウ祭りの前日、ニタンザワの岩の入り口に山の神を祀って拝むならわしである(船川・靴屋・上田野)。

2) 天狗に関する伝承

・熊倉山には天狗が住む。熊倉の天狗は、夜中に炭を吐き出す音を出す。炭焼きは、この音を聞くとふるえあがり、「天狗様が炭をふるいでふるっている」といった。熊倉山の天狗は、夜中に木を伐ったり、石を投げたりする。時には、「オーイ、オーイ」と人を呼ぶ(原・松葉)。

・天狗ジャクシというキノコは、樅の木に出る。これを玄関に吊すと魔除けになる(下郷・町分・橋場)。

・天狗は猿田彦命で、広場にある庚申様も同じである(原)。

・老木の北に出た一の枝は、天狗のとまり木といった。ツテ岩という巨岩の上に樅の木があり、天狗のとまり木があった。この枝を天狗の腰かけともいう(原)。

・昔、天狗を馬鹿にした人が、その後行方不明になった。その人は数日間にわたって天狗に山中を

引き回され、放心状態の所を助けられた。そのとき、「どこかわからないが、大きな松の木の上や、巨岩の上に連れて行かれ、最後に小高い山の上に投げ捨てられた」といった(中野)。

・三十番の札所(瑞竜山法雲寺)には、天狗が住むとか天狗が飛んでくるとかいう(豆サ原)。

・コウザワには天狗の祠があり、そこにいる天狗をコウザワの天狗様といった。コウザワの天狗様は、悪い子供をさらうともいう(反平)。

Ⅵ 荒川村各集落の天狗祭り

荒川村では、原以外にも24集落において天狗祭りの存在が確認できる。それらの概略を、荒川上流部にある集落から順に記述する。

1) 下郷

下郷の天狗祭りは、当たり日といわれる旧暦12月15日に行われた。参加する子供は、小学1年から高等科の2年までで、例年25人前後で行われていた。祭りをを行う場所は、荒川左岸の下池の河原である。橋の木を大天狗の柱とし、小天狗と小屋が作られた。天狗祭りの日待ちも旧暦の12月15日で、夕方から親方の家などで行われた。食べ物、小豆あん餅とケンチョン汁であった。下郷の人たちは、上の山にお天狗様がいるといい、そこには天狗の祠が祀られている。祭日には、昼間のうちにミクスズー対を供えた。点火の状況などは、原と同様であった。

2) 反平

反平では、昭和15年頃は12人ほどの子供が参加して天狗祭りを行っていた。天狗の祠はコウザワにあり、地元ではコウザワの天狗様と呼ぶ。祭りは12月15日で、小集落ではあるが大天狗・小天狗・小屋が作られた。大天狗の柱には、橋の木を使う。中央にウラのついた竹を立て、横木を組みトゾラなどで結わえた。祭日前に灯明銭を各戸から集め、その金は御神酒や菓子の購入に使われた。天狗祭りは、おいしい菓子がたくさん食べられるので、何よりも楽しみであったという。

3) 上平

上平の天狗祭りは、集落中央のマルタ(丸田)という田の中で行われた。大天狗・小天狗・小屋を作った。祭日は旧暦の12月15日で、親方の家などで日待ちをしてから点火した。上平と反平を合わせてウワゾリ(上反)といい、毎年10月24日にお天狗様の祭りを行っている。

4) 上郷

天狗祭りには、子供たちが午前10時頃に集合して、天狗の祠にお神酒を供えて拝んだ。祭りをを行う場所は、荒川の左岸、川端の付近である。

5) 町分

町分には天狗の祠がない。天狗祭りは荒川左岸の綱掛という河川敷で行われた。大天狗・小天狗・小屋が作られた。祭日には親方の家で日待ちが行われ、餅や五日飯などを食べた。天狗祭りの晩は満月である。月が高くなる頃全員で綱掛に行き、月を拝んだ後大天狗を拝んだ。こうすると、天狗様が天狗の上に来ているという。点火は、周囲の様子を見ながら親方が行い、小屋・小天狗・大天狗の順に火をつける。大天狗は、周りより遅く燃やすとよいとされた。

6) 亥鼻

亥鼻は、荒川村の西端にある。さらに荒川の上流に位置する大滝村では天狗祭りはない。亥鼻の天狗祭りは、荒川左岸の田端屋の下で行われた。参加者は、小学1年から高等科2年までであった。対岸の巨岩の上に大きな松があり、天狗はそこに降りてくるといわれている。祭日は旧暦の12月15日で、大天狗・小天狗・小屋が作られ、点火に先立ち、筒酒が大天狗の中段ほどに供えられた。

7) 上サ

天狗祭りに使う材料は、どの山からとってもよいとされ、祭日の1、2か月前から準備が始められた。大天狗を作る場所は愛宕山の山麓で、小学1年から高等科2年までの子供が参加した。昭和13年頃は、高等科の子供だけで天狗祭りを行ったこともあるという。その頃灯明銭は、1戸当たり5銭ほどであった。この金で菓子を購入し、親方が分け与えた。女子の分はとっておき、点火の少

し前に配布した。祭日は旧暦の12月15日で、その日は夕方まで小屋で遊び、その後、親方の家で日待ちがあり、餅などを食べた。大天狗の点火は、古くは遅かったというが、昭和30年代には午後7時頃であったという。当地の天狗祭りは、昭和35年頃消滅した。

8) 青梅

青梅の天狗祭りは、荒川右岸にある栃の木沢を下ったところで行われた。近くに天狗の祠と天狗の松があった。大天狗と小屋を作り、夕方にお天狗様を参拝し、大天狗に御神酒をかけた後、夜7時頃に点火した。青梅からは町分と中野の火が見えるので、その状況を見ながら親方が点火した。青梅の天狗祭りは昭和37年まで行われた。

9) 中野

天狗祭りの準備は、祭日である旧暦12月15日の1か月ほど前から始められた。子供たちは、学校から帰るとほとんど毎日、天狗祭りが行われる円通寺の上の田に集合して作業を行った。天狗祭りに使う材料は、どの山のものでもよいとされるが、遠いと運搬が大変なため、前山から求めることが多かった。大天狗・小天狗・小屋を作り、大天狗の1段目には麦カラを36束詰め込んだ。大天狗の横木の段は、例年7、8段作られた。大天狗の頂には、天狗の腰掛けとして麦カラ1束を結わえ付けた年もあった。

祭日の1週間ほど前に灯明銭集めを行い、この金で菓子を購入した。灯明銭の扱いと菓子の購入は親方の仕事で、下級生は手が出せないしきたりであった。祭日の夕方になると、円通寺の上の田で太鼓を叩いて知らせ、女子や幼児を呼び寄せた。集まった者には、灯明銭で買った菓子を分け与えた。その後、いったん日待ちの宿に帰り、餅やケンチョン汁を食べた。点火は親方がよその状況を見ながら小天狗・小屋・大天狗の順に行った。戦後、祭りを行う場所は、荒川右岸に移った。

10) 橋場

天狗祭りは、昭和35年頃までメエヤマ(前山)の中腹で行った。橋場の集落は15戸ほどであるため小天狗は作らず、大天狗と小屋を作った。祭日は、

旧暦の12月15日で、準備はその1か月ほど前に始められた。祭日には親方か上級生の家で日待ちがあり、油揚げ寿司やあんころ餅などを食べたという。夕食を済ませた後、前山に登って夜の8時頃点火した。点火の目安は、「月が山を離れるころ」とされた。

11) 豆サ原

天狗祭りは、ヒノチ沢付近で行われ、昭和12年頃は15人ほどの子供が参加していた。対象は、小学1年から高等科2年までであった。大天狗・小天狗・小屋を作り、麦カラは1戸当たり5束ほど提供していた。大天狗の柱材には、ミネバリやカンバなど針葉樹が用いられた。灯明銭は菓子を買うために集められた。祭日には、日待ちを行い、餅やケンチョン汁を食べた。暗くなるとヒノチ沢へ出かけ、大天狗の二階の部分にミクスズを備えた後、小天狗・大天狗・小屋の順に点火した。点火は親方が周囲の状況を見ながら行った。

12) 小野原

小集落であり、大天狗だけを1階の部分小屋状にして作った。昭和の初め頃には、小学1年から6年までの15人ほどの子供が参加し、高等科の人は不参加であった。祭りを行う場所は、東さしという荒川左岸の畑であった。祭りに用いる麦カラは1戸当たり3～5本集め、子供のいない家でも提供するならわしであった。灯明銭を集めて菓子を買ひ、自分たちで食べたり、女子に配ったりした。天狗祭りは戦後には行われなくなった。

13) 松葉

テンゴウ祭りと呼ばれ、祭日は旧暦の12月15日、準備はその1か月前から行われた。祭りが行われる場所は、古くは荒川神社近くの天狗様の境内であったが、戦後に押し手沢の下に変わった。参加対象は小学1年から高等科2年までで、最上級生が親方となり、祭事をとりしきった。大天狗・小天狗・小屋を作り、用いる麦カラは1戸当たり3束ほどであった。祭日の1週間ほど前に親方が灯明銭集めを行い、その金で菓子を購入して、準備段階における作業量に応じて下級生に分配した。点火は夜の8時頃で、親方が隣接する集落の点火

状況を見ながら小天狗に火を入れ、その後に大天狗を燃やした。祭日の日待ちはとくに行われず、小屋の中で菓子を食べる程度であった。

14) 大塚

昭和20年代初めまで、12月15日にテンゴウ祭りを行った。小学1年から6年の子供が参加し、大六天様(大六天という屋号の家の山)付近に大天狗・小天狗・小屋を作った。かつては田で行ったこともあったが、火を燃やすので人家から遠い山で行うようになった。準備は、木の調達や麦カラ集め、あるいは寄付金を求めて各家を回った。麦カラは、1軒から4、5束ずつ子供たちがセイタ(背板)で担いでもらい受けた。大天狗のための木は主に栗を用い、3本に組んで横木を3、4段渡した。大天狗には筒酒2本を備えて拝むが、これは火難除けのためという。寄付金は、1戸10銭から15銭であったが、兄貴カブの家では20銭出した。この金で菓子を買い、祭りを見に来た人に配った。当日は、上級生は大天狗、下級生は小天狗か小屋に入って遊んだ。夕方5時頃、皆で「燃やすぞ」とどなって火をつけた。点火は大天狗が後になるようにし、他地区の状況を窺って、なるべく自分のところが遅くなるように心がけた。

15) 下日野

テンゴウ祭りといい、旧暦12月15日に行った。小学1年から高等科2年まで20～30人が参加した。準備は木の調達、縄や麦カラ集め、寄付のお願いなどであった。木はどこから伐っても許された。「このことで文句をいうと火事になる」とさえいわれた。木はソノのような雑木で、上級生が指示したものを伐った。麦カラは、1軒につき2～3束ずつもらった。寄付金で菓子や酒を買った。テンゴウ祭りは、鷲の巣の渡し付近の河原で行い、大天狗・小天狗を作った。祭りの前日、川原へ神様を祀った。石を3～4段積み、酒・オサゴ・塩を供えた。この神様を拜んでから点火した。「(対岸の)平仁田が燃したから火をつけるか」というように、よそよりも遅く燃やすよう心がけた。下日野で祭りを行っていたのは戦前までで、石原の火事をきっかけに、学校が中止を勧告した。

16) 寺沢

テンゴウ祭りといい、12月15日に行われた。戸数約20戸の寺沢では、小学1年から高等科2年までの子供30人ほどが参加した。大きな櫓の大天狗、小さな櫓の小天狗を作った。小天狗を2つ作った年もあった。小屋を作ったこともあったが、一度火事を起こしたので、その後作らなくなった。材料に用いる木はどの山で手に入れてもよく、山主もお祭りのことだからといってとがめなかった。仕事は、高等科2年の子供が親方となり、下級生に指示をした。地区内の家に寄付をお願いに回る仕事もした。寄付金で菓子を買い、わら半紙を使っておひねりにし、祭りに来た子供に配った。多くの場合、親方は餅菓子、下級生は駄菓子を食べた。戦中の物不足の時には、もろこしを食べた。

テンゴウ祭りは、古くは集落を離れた川の合流点付近で行っていた。ところが、あるとき野火が出たため下流に移り、カワラという家のそばで行うようになった。かつては山の神にキリハライをし、酒・赤飯・菓子を供えて山の事故が起らぬように祈願した。祭りは、戦争が激しくなって中止となり、以後消滅した。

17) 芦川

テンゴウ祭りといい、12月15日、和田川原で行った。参加者は小学1年から高等科2年の子供であった。用いる木はどの山で伐ってもよかった。大天狗・小天狗を作り、大天狗の内部は2段造りにした。祭りには寄付をもらい、菓子を買った。サギョウジョウ(区の会議場)で日待ちをしたこともあった。芦川での祭りは、昭和20年代の前半まで行われていた。

18) 坂口

テンゴウ祭りといい、12月15日に行った。戦前は大島川原に大天狗・小天狗を作っていた。参加は小学1年から高等科2年までである。子供たちは、祭りの10日前から準備を始め、麦カラを集めたり、雑木や竹を伐った。麦カラを出せない家は、代わりにおぼしめしをくれた。大天狗・小天狗は3本の柱を組み、麦カラを囲んだ上に杉や桧の葉を挿した。床には麦カラを敷いた。入り口は、天

狗が住んでいたという松へ向けた。また、上の方に麦カラを2〜3束トヅラで結わえ付けた。大天狗の入り口には筒酒を2本備えた。この日はお天狗様がおでましになって見えているから、清め酒を進ぜるのだといい、それを子供が少しずつ飲んだ。

点火は、初めに小天狗、続いては大天狗という順であった。集落ごとの競争心があった時代では、よその大天狗をこわしにいたり、早めに火をつけ、燃やしてしまったこともあった。子供たちは、おぼしめしとしてもらったお金で菓子を買ひ、祭りを見に来た人に配った。戦争を境に、祭りは一時中断した。戦後復活したときは、ヤワリ(八割)という畑で行われ、昭和40年代まで続いた。

19) 上半縄・下半縄

テンゴウ祭りといい、旧暦11月15日に行った。参加は小学4、5年から高等科2年までで、最上級生が親方となった。ブクにあたる家からは参加しなかった。祭りの場所は半縄公会堂近くの畑で、そこに大天狗・小天狗を作った。柱は檜・ソノなどの雑木で素性のよいものを用いた。畑へ3本の柱を組み、横木を渡してトヅラで結わえ付けた。上方には、麦カラを炭俵のように束ねて付けた。そこは天狗が宿るところであると伝えられている。子供たちは、50戸ほどある地区内を農協裏の堀を境に堀上・堀下に分かれて回り、灯明料を集めた。その灯明料で菓子を買ひ、祭りに集まる人に配った。

点火は小天狗から始め、親方が火をつけると数人の子供がこれに続き、歓声を上げた。対岸の平仁田でも、燃やしつけると声を上げたので、それに負けないように大声を上げた。祭りの当日は豆腐を買って食べた。終戦直後は食糧不足で少しの畑もすべて耕作に利用したため、テンゴウ祭りは河原で行うようになった。この祭りは、皆で集まり、大火を燃やす楽しみがあったが、昭和30年代初めになると麦カラの入手が困難となり、行われなくなった。

20) 事上

テンゴウ祭りといい、白髭神社の境内で行われた。白髭神社は個人持ちの氏神で、かつては同地

の有力者が管理していたとされる。祭りは旧暦の12月15日に行われ、参加は小学4年生から高等科2年生までの男子であった。大天狗と小屋が作られ、その材料はどの山から伐ってもよいとされた。大天狗の柱には檜の木を用いることが多く、白髭神社に隣接した山から伐り出すことが多かった。麦カラは1戸当たり3束ほど集めるが、ブクの家からはもらわなかった。日待ちは行わない。集めた寄付金で親方が菓子を買ひ、参加者で分けたほか、女子に配布した。事上のテンゴウ祭りは、昭和に入ってから数えるほどしか行われていない。

21) 越

旧暦12月15日に行ひ、テンゴウ祭りと呼ぶ。参加は小学4年から高等科2年までで、15〜20人くらいであった。大天狗・小天狗は山へ作った。昭和30年代初めまで行われた。

22) 船川・糍屋・栃久保

テンゴウ祭りといい、旧暦12月15日に行った。祭りの15日くらい前に親方(高等科2年)が子供たちに召集をかけた。参加は小学6年から高等科2年で、20〜30人であった。木は割れにくいカタギを用い、主に檜・櫟が選ばれた。この木はどの山で伐っても許された。そればかりか、テンゴウ祭りの木は「伐られると運がよい」といわれ、山主はかえって喜んだという。木を担ぎおろすのは、高等科1年や小学6年の仕事であった。麦カラは各家から1束ずつもらい受け、子供たちはこれを背板につけて運んだ。集める麦束は、およそ80把であった。

祭りは道路から50mほど山へ上がったニタンザワで行った。そこは、今でもテンゴウ祭りの山と呼ばれている。作業は地ならしやニタンザワへ上がる道の整備を行った後、3本の柱を組み、横木を渡して大天狗を作った。柱の上方に麦束を1つ結わえ付けた。大天狗を作り終えた後、小天狗を作った。祭りが近づくと、家々へ「テンゴウ祭りのおぼしめしをください」といって寄付を頼みに歩いた。金額は、家によって違いはあるが、昭和14〜15年頃で5銭・10銭・15銭くらいであった。

祭りの前日、この金で菓子を買いに行った。買い物は親方の仕事で、自転車に乗り、秩父の菓子屋に行った。親方は餅菓子を食べたが、他の子は駄菓子であった。山の神は、祭りの前日、ニタンザワの岩に祀った。岩の上に神官から受けた幣束を立て、オサゴ・塩・酒・水を供えた。準備が整うと、「明日テンゴウ祭りをするから、〇〇時頃来てください」と集落内での役職である行事へ伝えに行った。当日は、祭りに来た子供に菓子を配った。テンゴウ祭りの山へ登ることができたのは、祭りに関わる子供と行事のみで、見物は下の道から行った。山の神は子供が拝み、御神酒は行事に飲んでもらった。

点火は小天狗から始め、隣接集落で火がつくまでは大天狗に火をつけなかった。火をつけると大声ではやしたてた。どんなに風が吹く日でも、このときになると不思議に風がおさまったという。「攻めにいくべえ」といって、よその大天狗をこわしにいったこともあった。船川のテンゴウ祭りは高いところで行ったので、他集落からこわしにくるのは困難であった。この日、豆腐を買って食べたが、お日待ちは行わなかった。ブクにあたる家の子供は祭りに出なかった。ブクの家からは、おぼしめしや麦カラをもらうことも避けた。「テンゴウ祭りが終わると正月が来る」といわれたが、閏の年は、テンゴウ祭りが正月にかかることもあった。新制中学ができると、子供に勉強させようという風潮が高まり、徐々に中学生が参加しな

くなっていった。小学生だけでは十分な作業ができず、昭和30年代初めになると下火となった。

23) 上石原・下石原

テンゴウ祭りといい、旧暦の12月15日、小学生から高等科2年までの子供が参加して、トヌマガワラ(飛沼川原)で行った。祭りの前には、子供たちは地区内を回って麦カラを集めた。また、近くの林から楠・櫟などのまっすぐな木を伐り出し、大天狗・小天狗を作った。どちらにも頂点のそばへ麦カラを結わえ付けた。大天狗は2階造りにし、床の真ん中はいろりを作った。大天狗の中で遊ぶのは上級生で、とりわけ高等科2年になると2階に上がった。小天狗には、小さい子供が入って遊んだ。子供たちは、寄付を求めて各家を回り、高等科2年の子供が秩父へ行きこの金で菓子を買った。菓子を袋に入れ、当日の見物人に配った。当日は、暗くなるのを見計らって大天狗・小天狗に点火した。祭りは昭和30年代後半まで続いたが、その後中断し、昭和58年に復活した。復活後は大天狗を有志の大人が、小天狗を子供が作る。

24) 久那

テンゴウ祭りといい、大正5～6年までウマアレーと呼ばれる河原で12月15日に行っていた。青竹を3本組み、麦カラを付けて大天狗・小天狗を作ったが、火事を起こし、以後取り止めになった。荒川村では、久那が最初にテンゴウ祭りを廃止した。